暮らしの違いから見えたアウクスブルクの魅力

高山　裕明

令和８年８月 29 日から９月７日までの 10 日間、尼崎市青年使節団の副団長として、姉妹都市であるドイツ・アウクスブルク市を訪問しました。

今回の滞在では、青年使節団の活動を通じて現地の方々と交流を深めるとともに、ドイツの歴史や文化、生活習慣に直接触れる貴重な機会を得ることができました。

そこで、この報告書では、訪問先や活動内容を時系列で振り返るのではなく、「日本とドイツの文化・生活習慣の違い」に焦点を当て、実際に見聞きしたことや体験したことを中心に、特に印象に残った５つのテーマについて紹介したいと思います。

１ 街の美しさを支えるデポジット制度

アウクスブルクに滞在して印象的だったことの一つが、街の美しさです。

街を歩いていても道端にゴミがほとんど落ちておらず、歴史ある建物や美しい街並みが清潔に保たれていると感じました。

その背景の一つに、ドイツで広く導入されている「デポジット制度（Pfand：プファンド)」があります。これは、ペットボトルや瓶などの飲料容器を購入する際に、商品代金とは別に一定額の預かり金を支払い、使用後に容器を返却すると、そのお金が戻ってくる仕組みです。

例えば、一般的な使い捨てペットボトルには 0.25 ユーロのデポジットが設定されています。この制度によって、飲み終わった容器を捨てずに回収する習慣が根付いており、リサイクルの促進やポイ捨ての抑制につながっていると考えられます。

私自身も、アウクスブルク滞在中に飲み終わったペットボトルを捨てずに保管し、最終日に宿泊していたホテルの近くにあるスーパーマーケット「REWE（レーヴェ)」へ持って行きました。店内に設置された専用の回収機に容器を投入すると、返金額が記載されたレシートが発行され、買い物の際に精算することができます。今回、私が返却した容器のデポジットは、合計で 2.58 ユーロ（約 460 円）になりました。

日本では飲み終わったペットボトルを分別して捨てることが一般的ですが、ドイツでは「返却するとお金が戻ってくる」という仕組みが、人々の環境に配慮した行動を後押ししています。実際にこの制度を体験したことで、街の美しさを保つためには、一人ひとりの意識だけでなく、自然と環境に優しい行動につながる仕組みづくりも大切なのだと感じました。

２ 家族や友人との時間を大切にする日曜日の休業文化

アウクスブルクに到着した日は、ちょうど日曜日でした。

街の中心部を歩いてみると、コーヒーショップやカフェなどがちらほら営業している程度で、ほとんどのお店が閉まっていたことが印象的でした。

日本では日曜日といえば、多くの人が買い物や外食を楽しむ日であり、商業施設や飲食店も賑わっています。そのため、ドイツの街の様子は、日本とは大きく異なるものに感じられました。

ドイツでは、日曜日は基本的に「休息の日」とされており、法律によって多くの小売店の営業が制限されています。スーパーやデパートなども原則として休業となり、一部の飲食店や駅構内の店舗などを除き、買い物ができる場所は限られています。これは、日曜日を単なる休日

ではなく、働く人々が休息を取り、家族や友人と過ごす時間として大切にする文化が根付いているためです。

一方で、お店の多くが閉まっているからといって、街に人がいないわけではありませんでした。アウクスブルクの中心街には多くの人々が集まり、家族や友人と会話を楽しんだり、カフェでくつろいだり、散歩をしたりする姿が見られました。買い物を目的とするのではなく、人との交流やゆったりとした時間を楽しんでいる様子が印象に残っています。

私自身も、アウクスブルク市の担当者や同僚、長浜市の青年使節団の団長・副団長とともに、ドイツのプロサッカーリーグ「ブンデスリーガ」の開幕戦を観戦しました。ドイツで高い人気を誇るサッカーを楽しみながら、国や立場を超えて交流を深めることができ、充実した休日を過ごすことができました。こうした体験を通じて、休日を単なる休息の時間としてだけでなく、人とのつながりを深める大切な時間として楽しむドイツの文化を、身をもって感じることができました。

日本では、日曜日は多くのお店にとって書き入れ時であり、働く人にとっては必ずしも休息の日とは限りません。一方、ドイツでは社会全体で休息の時間を確保する仕組みがあり、仕事と私生活のバランスを大切にする考え方が感じられます。

今回の滞在を通じて、日曜日の過ごし方一つをとっても、日本とドイツでは生活に対する価値観に違いがあることを実感しました。お店が開いている便利さも大切ですが、家族や友人との時間を社会全体で大切にするドイツの文化も、とても魅力的だと感じました。

3 信頼を基本とした改札のない公共交通機関

アウクスブルクに滞在して驚いたことの一つが、公共交通機関に改札がないことです。

日本では、電車に乗る際には駅の改札で切符やICカードを確認することが当たり前ですが、ドイツでは多くの鉄道駅に改札が設置されておらず、切符を持っていればそのままホームに入り、電車に乗ることができます。

私自身も、アウクスブルクからバート・ヴェリスホーフェンにあるサウナ施設へ向かう際に電車を利用しましたが、駅には改札がなく、そのままホームに入ることができました。

しかし、乗車中に係員が車内を巡回し、乗客の切符を確認する場面に遭遇しました。

ドイツでは、このように係員が抜き打ちで切符を確認する「検札」という仕組みが採用されています。有効な切符を持たずに乗車していた場合には、原則として60ユーロの追加料金が科されます。

日本では、駅の改札で乗車前後に切符を確認することで、不正乗車を防ぐ仕組みが一般的です。一方、ドイツでは、乗客が正しく切符を購入していることを前提としながら、抜き打ちの検札によって不正乗車を防いでいます。この仕組みは「信用乗車方式」と呼ばれ、改札機の設置や維持管理にかかる費用を抑えられるほか、乗客がスムーズに駅を利用できるという利点があります。

また、日本では交通系ICカードを利用して改札を通過することが一般的ですが、ドイツでは紙の切符に加えて、スマートフォンのアプリなどで購入したデジタルチケットも広く利用されています。改札を通る必要がないため、駅と街が一体となっているように感じられ、ホームへの移動も非常にスムーズでした。

今回の体験を通じて、日本とドイツでは公共交通機関の運営方法に大きな違いがあることを実感しました。日本の改札方式は確実な運賃収受を重視した仕組みである一方、ドイツの信用乗車方式は、利用者の利便性と効率的な運営を両立させる仕組みだと感じました。普段何気なく利用している電車にも、国によって異なる考え方や工夫があることを知る、興味深い経験

となりました。

4 暮らしに根付くドイツのビール文化

ドイツといえば、世界有数のビール大国として知られています。今回のアウクスブルク滞在でも、ビールが人々の暮らしに深く根付いていることを実感しました。街にはビアガーデンやビールを楽しめる飲食店が数多くあり、家族や友人と会話を楽しみながらビールを飲む姿が印象的でした。

ドイツでは、ビールは単なるアルコール飲料ではなく、人々の交流や地域の文化を象徴する存在でもあります。特にバイエルン州ではビール文化が盛んで、屋外のビアガーデンで食事や会話を楽しむ習慣が広く親しまれています。また、ミュンヘンで開催される世界最大級のビール祭り「オクトーバーフェスト」をはじめ、各地でビールを楽しむお祭りが開催されています。アウクスブルクでも、春と夏の終わりに開催される伝統的なお祭り「プレラー(Plärrer)」があり、ビールを片手に音楽や食事を楽しむ文化が受け継がれています。

私自身も、青年使節団の引率業務を終えた後、夜の会食では必ずといってよいほどビールを飲み、ドイツのビール文化を身をもって体験しました。ドイツのビールは種類が豊富で、地域ごとに特色があり、食事とともに味わうことも滞在中の楽しみの一つとなりました。ビールを囲みながら会話を交わす時間は、現地の人々との交流を深める貴重な機会にもなりました。

日本でも仕事帰りの一杯や宴会など、ビールは人々の交流に欠かせない存在です。しかし、ドイツではビアガーデンや地域のお祭りなど、ビールを楽しむ場所や機会が生活の中に広く根付いており、世代を超えて親しまれていることが特徴的だと感じました。また、日本では冷えたビールを比較的小さなグラスで飲むことが多い一方、ドイツでは0.5リットルの大きなグラスや、時には1リットルのジョッキで提供されることもあり、その飲み方にも文化の違いを感じました。

今回の滞在を通じて、ドイツのビール文化は、単にお酒を楽しむだけでなく、人と人とのつながりを深め、地域の伝統を受け継ぐ大切な役割を果たしていると感じました。実際に現地でビールを味わい、人々と交流した経験は、ドイツの文化をより身近に感じることのできた思い出の一つとなりました。

5 エアコンに頼らないドイツの生活文化

最後に、アウクスブルクに滞在して、日本との違いを感じたことの一つが、エアコンに頼らない生活文化です。日本では、夏の暑さをしのぐためにエアコンが欠かせない存在となっていますが、ドイツでは住宅やホテルなどに冷房設備が設置されていないことも珍しくありません。

私が宿泊したホテルにもエアコンは設置されていませんでした。日本では夏場にエアコンのないホテルに宿泊することはあまり考えられないため、最初は少し驚きました。しかし、実際に滞在してみると、エアコンがなくても特に不便を感じることはなく、快適に過ごすことができました。窓を開けることで外の涼しい空気を取り込むことができ、自然の風を感じながら過ごせたことが印象に残っています。

ドイツでエアコンがあまり普及していない背景には、日本との気候の違いがあります。日本の夏は高温多湿で、夜間も気温が下がりにくい日が多い一方、ドイツでは比較的湿度が低く、夏でも朝晩は涼しくなる日が多いという特徴があります。そのため、窓の開閉による換気や、ブラインド・シャッターなどの日よけを活用し、室内の温度を調整する生活習慣が根付いています。また、省エネルギーや環境への配慮も、冷房に頼りすぎない暮らしを考えるうえで大切な要素となっています。

一方、日本では近年、夏の猛暑が続いており、

熱中症を防ぐためにもエアコンの適切な使用が重要となっています。ドイツでも近年は気候変動の影響によって猛暑日が増え、冷房設備の必要性が高まっていますが、それでも日本と比べると、自然の風や建物の工夫を活用して暑さに対応する文化が残っています。

今回の滞在を通じて、同じ夏であっても、国や地域の気候によって暮らし方が大きく異なることを実感しました。日本ではエアコンが当たり前となっていますが、ドイツでの生活を体験し、自然の涼しさを上手に取り入れる工夫や、エネルギーをできるだけ使わずに快適に過ごすことの大切さを改めて感じました。

最後に、今回のアウクスブルク滞在を通じて、日本とドイツでは、日常生活の様々な場面で文化や習慣、考え方に違いがあることを実感しました。現地で実際に体験したからこそ気づくことができた発見も数多くありました。

もちろん、日本とドイツのどちらが優れているということではなく、それぞれの国の歴史や気候、価値観などを背景に、異なる文化や生活習慣が形成されてきたのだと思います。普段当たり前だと感じている日本の暮らしを、違った視点から見つめ直す良い機会にもなりました。今回の滞在で得られた経験や気づきを大切にするとともに、異なる文化や価値観を理解し、尊重することの大切さを改めて感じました。そして、こうした相互理解の積み重ねこそが、姉妹都市交流の大きな意義の一つであると考えています。

今回の青年使節団の派遣にあたり、お世話になったアウクスブルク市の皆様をはじめ、交流に携わっていただいたすべての方々に心から感謝申し上げ、報告書の締めくくりとしたいと思います。





